

島原心中

菊池寛

青空文庫

自分は、その頃、新聞小説の筋を考えていた。それは、一人の貧乏華族が、ある成金の怨みを買って、いろいろな手段で、物質的に圧迫される。華族は、その圧迫を切り抜けようとして蹴^{あが}く。が、蹴^{あが}いたため、かえって成金の作っておいた罠^{わな}に陥って、法律上の罪人になるという筋だった。

自分は、その華族が、切羽詰って法律上の罪を犯すというところを、なるべく本当らしく、実際ありそうな場合にしかかった。通俗小説などに、ありふれたような場合を避けたかった。自分は、そのために法律の専門家に、相談してみようと考えた。

自分は、頭の中で、旧友の中で法学士になっている連中を数え

てみた。高等学校時代の知合いで、法学士になっている連中は、幾人もいることはいたが、郵船会社にはいつて洋行したり、政治科を出て農商務省へ奉職したり、三菱へはいつている連中などばかりが思い浮んで、自分の相談に乗ってくれそうな、法律専門の法学士はなかなか思い当らなかった。その中に、ふと綾部という自分の中学時代の友人が、去年京都の地方裁判所をよして、東京へ来て、有楽町の××法律事務所に勤務していることを思い出した。上京当時、通知のハガキをくれたのだが、その××という有名な弁護士の名前が、不思議にはつきりと、自分の頭に残っていたのである。

自分は、綾部が、三高にいたときに会って以来、六、七年ぶり

に、彼を訪ねた。彼は、学生時代と見違えるほど、色が白くなっていた。そして、三、四年の間検事をやっていた名残りが、澄んだ、そのくせ活気のない、冷たい目のうちに残っていた。彼は、快く自分を迎えて、自分の小説の筋に適合するような犯罪を考えしてくれた。刑法の条文などをあちらこちら参考にしながら、かなり工夫を凝^こらしてくれたのである。その上に、彼はこんなことをいった。

「いや、貴君が、小説家として、法律の点に注意をしているのは感心です。どうも、今の小説家の小説を読むと、我々専門家がみると、かなりおかしいところがたくさんあるのです。懲役の刑しかないところが禁錮になっていたり、三年以上の懲役の罪が二年

の懲役になっていたり、ずいぶん変なところがあるのです。それに、小説家のかく材料が、小説家の生活範囲を一步も出ていないということは、かなり不満です。我々の注文をいえば、もつと、法律を背景とした事件、すなわち民事、刑事に関する面白い事件を、材料として大に取り扱ってもらいたいですな。一体、完全な法治国になるためには、各人の法律に関する觀念が、もつと発達しなければだめです。それには、もつと君たちが、法律に關係のある事件をかいてくれて、法律というものが、人間生活にどんなに重要な意義を持っているかということを、一般に知らしてもらいたいと思うのですがね。もし、君がかくつもりなら、僕が検事時代の経験をいろいろ話してあげてもいいと思いますよ」

そんな、冒頭をしながら、彼は次のような話を、自分にしてくれた。

「俤くるまが、大門を潜ったとき、『ああ島原とはここだな』と、思うと同時に、かなり激しい幻滅とそれに伴う寂しさを、感ぜずにはいらなかったのです。お恥かしい話ですが、僕が島原へ行つたのは、その時が初めてです。僕は高等学校時代から大学へかけて、六年も京都にいたのですが、その時まで、昔からあれほど名高い島原を、まだ一度も見ることがなかったのです。一、二度、友人から『花魁おいらんの道中を見にいかないか』と、誘われたことがあつたのですが、謹厳——というよりも、臆病であつた僕は、そ

んなところへ足踏みすることさえ何だか進まなかったのです。

だから、大学を出て間もないその頃まで、僕の頭に描いた島原は、やっぱり小説や芝居や小唄や伝説の島原だったのです。壮麗な建物の打ち続いた、美しい花魁の行き交うている、錦絵にあるような色街だったのです。

従って、その日——たしか十一月の初めでした——上席の検事から、島原へ出張を命ぜられたとき、僕は自分の心に、妙な興味が動くのを抑えることができなかったのです。島原へ行く、しかもその朝行われた心中の臨検に行くというのですから、僕は場所に対する興味と、事件に対する興味とで、二重に興奮していたわけです。

『島原心中』という言葉が、小説か芝居かの題目のように、僕の心に美しく浮んでいたのでした。

が、俤がそれらしい大門を通りすぎて、廓の中へ駆け込んだとき、下ろした幌ほろのセルロイドの窓から十一月の鈍い午後の日光のうちに、よど澱んだように立ち並んでいる、屋根の低い朽ちかけているような建物を見たときに、それが名高い色街であるというだけに、いつそう悲惨なあさましいような気がしたのです。衰弱し切った病人が、医者の手から、突き放されて、死期を待っているように、どの家もどの家も、廃頽するままにまかせられているような気がしたのです。定紋の付いた暖簾の間から見える家の内部までが、どれもこれも暗澹あんたんとして陰鬱に滅亡して行くものの姿を、

そのまま示しているように僕には思われたのです。

俵が、横町へ折れたとき、僕の目の前に現れた建物は、もつと悲惨でした、悲惨というよりも、醜悪といった方が、適当でしょう。どれも、これも粗末な木口を使った安普請で、毒々しく塗り立てた格子や、櫺子窓の紅殻色が、むつとするような不快な感じを与えるのです。煤けた角行灯に、第二清開楼とか、相川楼などと書いた文字までが、田舎の遊廓にでも見るような下等な感じを与えました。

心中があつた楼うちの前には、所轄署の巡查が立っていたので、すぐそれと分かりました。

僕が俵から降りたときには、裁判所を出るときに、持っていた

ような興奮も興味も残っていませんでした。

その楼は、この通りに立ち並んでいる粗末な二階家の一つでした。入口を入ると、土間が京都風に奥の方へ通っていて、左の方には家人や娼妓たちの住んでいる部屋があり、右はすぐ箱梯子になっ
ていて、客がそのまま二階へ上れるようになってい
るのです。

心中の行われたのは、無論二階でした。僕が、警部の出迎えを受けて、この箱梯子を上ろうとしたとき、ふとその土間を途中で遮さえぎっている浅黄色の暖簾の間から、じろじろ僕の顔を見ているこの家のお主婦かみらしい女に、気が付いたのです。広い額際が抜け上
つて、目が無気味な光をもっている、一目見ると忘れられないよ
うな女でした。

僕は、その梯子段を、かなり元氣よく上ったのです。すると、先に上った警部は、上り詰めると、急に身体を右に避けるようにするのです。僕は、そんなことを気にしないで、かまわず上りきったのです。すると、梯子段を上りきった僕の足もとに、異様な品物が——その刹那は、本当にそう思ったのです——ころ転がついてるのです。が、はっと気が付いてみると、僕の靴下をはいた足は、その廊下に仰向けに倒れている女の、振り乱した髪の毛を、危く踏むところであつたのです。その時の、僕の受けたシヨック激動は今でも幾分かは思い出すことができますのです。僕は、心中という以上、どこかの部屋の中にでも、尋常に倒れているものだと思つていたのです。よく見ると、心中はその梯子段を上ったとつつきの

四畳半で行われたとみえ、女が倒れかかるはずみに、はずれたらしい障子の中の畳には、どろどろと凝り固まっている血が、一面にこびり付いているのです。その血の中に、更紗か何からしい古びた蒲団が、敷き放されていて、女の両足は、蒲団の上に、わずかばかりかかっているのです。天井が、頭につかえるほど低い部屋の中は、小さい明り取りの窓があるだけで、昼でも薄暗いのですが、その薄暗い片隅には、心中前に男女が飲食したらしい井とか、徳利などが、ごたごた片寄せられているのです。壁は京都の遊郭によくある黄色っぽい砂壁ですが、よく見ると、突き当りの壁には、口に含んで霧にでも吹いたように、血が一面に吹きかかっているのです。

まだ、そうした場所に馴れなかった僕は、一目見ると、その凄惨な情景から、ぞつと水を浴びるような感じを受けましたが、立会いの警部や書記などの手前、努めて冷静を装いながら、まず女の傷口を見ました。見事に頸動脈を切ったとみえ、身体中の血潮がことごとくその傷口から迸ったように、胸から膝へかけて、汚れ切ったネルの寝衣をべとべとに浸した上、畳の上から廊下にかけて、一面に流れかかっているのです。が、傷口を見ているときに、もっと僕の心を打つものは、その荒み果てた顔でした。もう確かに三十近い細面の顔ですが、その土のようにかさかさした青い皮膚や、目尻の赤く爛れた目などを見ると、顔という気はどうしても起らないのです。人間だという気さえ起らないのです。

ただ、名状しがたい浅ましきだけを、感じたのです。

死にそこなつた男の方は、別室に移されていて、医者の手当を受けていたのです。僕が臨検した主な目的は、相手の男を尋問して、無理心中ではなかつたか、また、たとえ合意の心中であつたにしろ、男の方に自殺幫助ほうじょの事実がなかつたかを確かめるためだつたのです。

二人が遺書を認したためていることで、無理心中の疑いは少しもありませんでしたが、自殺幫助の疑いは、十分にあるのでした。

僕は、その男を臨床尋問するために、寝かされているという別室へ行つたのです。見ると相手の男は、頭を角刈にした、二十歳

前後の、顔の四角な職人らしい男でしたが、喉のどの傷をくるくる巻いた繃帯が、顎を埋めてしまうほど、ふくらんでいました。顔には血の気がなく、どろんと気の抜けたような目付をしていましたが、傷が致命傷でないことは、医師でない素人目にも、すぐ分かりました。

僕は、尋問にかかる前に、警察の方で調べた二人の身元とか、心中に至るまでの事情を、一ひとつと通りきいたのです。男の方は、福島県の者とかで、西陣の職工だが、徴兵にとられていて、十二月には入営することになっていたということと、女は鳥取県のものであるが、今年二十九の年になるまで、十年近く島原で、勤めているのだが、借金に追われて、まだ年季が明けないでいること、

平生から陰気な沈んだ女であること、この頃郷里の方から、母が病氣だという知らせが来たので、見舞いに行きたい行きたいと、口癖にいつていながら、勤めの身として、それが果し得ないのを、口惜しがっていたこと。男は、十月の初めから通い始めて、その日が六、七回目であつたこと、心中は午前の七時頃に行われ、家人たちはまだ寝入っていたので、三十分ぐらい経つて、お主婦がやっと、男の呻き声を聞きつけたこと、お主婦が駆け上ったときは、女の方はもうまったく息が絶えてしまっていたこと、男が持っていた短刀をお主婦がもぎ取ったこと、短刀を使う前に二人は揮発油を飲んだが、死に切れなかったこと。

僕は、そうした前後の事実をきいた後、尋問にかかったのでし

た。

僕が、尋問を始めようとすると、警部と巡査とは、その男を床の上に、座らせようとするのです。男は首を挙げようとして、喉の傷を痛めたとみえ、齒を食いしばるようにして、じつと、その苦痛を忍びながら起きようとするのです。

『苦しければ、そのままでもいいよ』と、僕が注意をしますと、警部はそれを遮るように、

『なに、大丈夫ですとも。気管を切っているだけですから、命には別条ありません』といいながら、今度はその若者を叱るように、『さあ！　しゃんとして、気を確かにするんだぞ！　こんな傷で、

死ぬことはないのだからな』

といいながら、肩のところを一つポンと叩くのです。

若者に対する、いたいたいという同情は、すぐ僕の職業的良心に抑えられていました。僕が、尋問を始めたときには、もう、普通の検事の口調になっていました。僕は、その頃、だんだん被告に対する尋問のこつを覚えて来ていたのです。

『さあ、これから、お前に少しききたいことがあるのだが、お前もな、できたことは仕方がないことだから、何もくよくよ考えずに、男らしくありのままに話してもらいたいのだがなあ。お前もこれほど思い切ったことをやった男だから、思い切って男らしくいさぎよ潔く、俺のいうことに答えてくれないかん。いいかい。どうした

といったら、どう取られる、こういったらこう取られるなどということを、腹の中で考えていたらあかん。考えていうと、ウソになる。ウソになると、物のつじつまが合わなくなる。つじつまが合わなくなると、本当のことまでがウソになる。いいかい。だから、お前が俺の合点のいくように、本当にそうかということになると、できたことは仕方がないということになって、結局お前の利益になるんじゃない。だから素直にいった方が、一番かしこいことになるのだからな』

検事でも、予審判事でも、尋問を始める前には、きつとこんな風なことをいうのです。そして、相手の心をのんびりさせておかないと、嘘ばかりいって困るのです。

『どうだい、男らしくいうつもりかい』

こう、念を押しますと、繃帯で首の動かせないその若者は、傷ついた喉から、呻くような声を出して、
うめ

『男らしく申します。申します』と答えました。が、たいていの被告は、こう答えておきながら、嘘をつくものです。

『女の名前は何というのだい？』

『錦木といいます』

『いつ頃から、通っているのじゃ』

『十月の初めからです』

『じゃ一月にならないのだな。今までに何遍通った』

『今度で六回目です』

『一度いくらずつ金がかかるのじゃ』

『へえ！』若者は、ちよつといい澱^{よど}んだが、痛そうに唾を呑み込んでから『六円から十円ぐらいまでかかります』

『お前は工場でいくら貰っているのじゃ』

『日に一円五十銭ぐらい、貰うとります』

『うむ、それでその中から食費だとか風呂代だとか引くと月に何程ぐらい残るんじや』

『へえ、十円ぐらい残ります』

『そうか、十円ぐらいしか残らんで、それで月に六遍も遊んで、一度に六、七円ずつも使うと金が足らなくなるわけだな』

『へえい』

『じゃ、何か別な所で金の工面をしたわけだな』

『へえい』

『誰かから、金の工面をしてもろうたわけだな』

『へえい！ 友達から二十円ばかり借りました』

『そのほかにないか』

『親から十円借りました』

『うむ。合して三十円だな。そのくらいの借金なら、払えないという借金じゃないな』

『へえい』

『一体、どうしてこんなことをやった』

若者は、しばらく考え込んでいたようでしたが、急に咳き込ん

で来たかと思うと、泡のような血を口から吐き出しました。気管の傷のために、血が口の中に洩れるのです。

僕は、自分の尋問が、この青年の容体を險悪にしはしないかと思つたので、警察医にききますと、彼は平氣な顔をして、

『何！ 大丈夫です。どんなことをしたって、命に別条はありません。御心配なくお続け下さい』といいました。

僕は、それに安心して改めて若者にいいました。

『そら、そんな風に考えたら駄目だよ。あつさりいうのだよ、あつさり』

若者は、唇の周囲についた血を鼻紙で拭きながら、

『私は、今年は兵にかかっとりますので、入營するまでには金で

も溜めて、両親も欣ばせようと思つていましたのに、こんなことで金は溜りませんし、借金はできるし、それにあの女も可哀そうな女で、国へ一度母親の見舞いに帰りたい帰りたいいうておりましたけれど、帰れんような始末で、いつそ死んでもうたらという、相談になりましたんで』

『うむ。それで一緒に死ぬ相談をしたのか。しかし借金だといって、わずかばかりの金じゃないか。それに、女がそれほど、国に帰りたいのなら、お前が連れて帰つてやればいいじゃないか。何も遠い所ではなし、鳥取じゃないか』

『へえい！　それがそうはいきませんので。まったく』

『そうかね、お前のいうことも、一応もつともに思えるが、ただ

それだけで死んだというのは、どうも俺の腑ふに落ちないんだが。考えないで、さっぱりいうてみんな。考えていうと嘘になつていかん』

そういいますと、若者はその蒼白の顔に、ちよつと血の気を湛えながらいいました。

『命を投げ出してやりましたけに、嘘なんか決して申しません』
相手は少し激したが、僕は冷然たる態度をもつていいました。

『そうかね。そんなら、それでいいが、俺にはどうも腑に落ちないんだがね。俺の腑に落ちんわだかまということは、つまり話している方のお前の心に、何か蟠わだかまりがあるんじゃないかね。こんな時に、本当のことがいえんようじゃ、男として恥じやないか。何か別にわ

けがあるんだろう。何か悪いことでもしたんじゃないか』

『いいや、決して悪いことなんか』と、若者は急^せき込んで答えると同時に、傷口からまた血が洩れたのでしよう、苦しそうに咳き込みました。僕の心持は、その時もう職業的意識でいっぱいになっていて、青年が苦しがつても、最初ほどの同情は湧きませんでした。そればかりでなく、僕は、相手はかなり執拗なので、尋問の方向を急に變えてみました。

『じゃ、それはそれとして置いて、一体どちらが先にやったのか、お前の方か、それとも女の方か』

『あたしが先へ死ぬといひまして、女が先に短刀を喉へ突き刺してから、今度は畳へ突きさして私にくれました』

『うむ、なるほど、それで一体女はどんな風に突いたんだ』

『それは、あの女が、刃の方を上に向けて、喉へ突き刺すと、血がだらりと流れました』

『その短刀を握った手は、右かい左かい』

『右です』

『そうかい。それからどうした』

『それから、私が短刀を受け取って、一突き刺したのですが、苦しくて苦しくて、私は思わず立ち上ったのです』

『それから』

『私は唸^{うな}ったように思います。それから夢中になってしまいました』

『そうか、夢中になったのか、それであの壁に血がかかっているのは、どうしたのだ』

『私が、苦しまぎれに寄りかかったのです』

『それからどうしたのだ』

『気が付きますと、お主婦^{かみ}が私の持っている短刀をもぎとっていったのです』

『なるほどね。そういうわけか。あの錦木という女は、えらい女だな。しかし、そりやお前、嘘じゃないか。その女が、喉を突いたところを、もう一度いつてみんか』

同じことを、二度いわせるのが、僕らが尋問の常套手段なのです。被告が嘘をいっていれば、きつとそこにつじつまの合わない

とところができるのです。が、それにしても、喉に傷を持っている被告に二度同じことを繰り返させることが、かなり残酷しれつのように思われないでもなかったのです。が、その当時、僕の熾烈しれつな職務心は、そんな心をすぐ打ち消したのでした。

それでも、若者は前の陳述と矛盾しないように、同じことを繰り返しました。

『そうかね。その女が、一人でやった！　が、お前手伝ってやりはしなかったかね。女が可哀そうじゃないかね。どうせ二人で死んで行くのだもの。女が苦しんでいれば、お前も手をとって力を添えてやるのが人情じゃないか。それが、人間として美しいことじゃないかね。いいか悪いかは別問題として、そうあるべきところ

ろじやないかね』

先刻、女の死体を一目見たときに、僕は女が、どちらかといえ
ば、呼吸器でもが悪いように瘡せた女で、男が陳述するような、
勇気がある女とは、どうしても思えなかったのです。僕は、自殺
幫助の事実があることを最初から信じていたのです。それに、先
刻ちよつと見たときにも、傷口が一刀のもとに見事に突かれてい
ることに気が付いていたのです。

『どうだい。俺には、あの女に、お前がいうほど勇気があるとは、
どうしても思えないのだがね。そこが、不思議で堪らないのだが
ね。どうだい。本当のことをあつさりといってくれんな。実は
お前が、突いてやったのだろう』

若者は明らかに狼狽しながら、

『いえいえ、滅相な滅相な』と打ち消しました。

『じゃ、きくがね。あの女の喉のところに掻き傷があるが、あれはどうしたんだ』

若者は顔が赤くなつたかと思うと、黙っていました。

『お前が、一緒に突いてやったのじゃないか』

若者は、首を横に、微かに動かししました。

『じゃ、そんな覚えはないというんだね。女が喉を突くとき、お前の手は女の身体に触れていなかったというのかい』

『いいえ。二人抱き合つて』

僕は心のうちで、『しめた！』と叫びました。

『二人抱き合つて、うむ。先刻は、そんなことはいわなかったよ
うだね。なるほど、二人抱き合つて』

『二人一緒に抱き合つて、女が喉を突くと、一緒に転ころげたのです。
それで、血が出たから押さえてやろうとしたのです』

『なるほど、お前のいうことは、だんだん本当に近くなってきた
じゃないか。が、もう少し本当でなければいかん。もう少しのと
ころだ。もう少し本当にいえるのだ』

『それで、女がもがいて、手で喉を掻きむしったのです』

『なるほどな。それで、掻き傷ができたというのだな。そんなこ
ともあることだから、それも本当にとれる。だけど、お前よう考
えてみるがいいぞ。普通の女というものは気の弱い人間だぜ。鬼

神のお松というような毒婦だとか、乃木大将の夫人などという女丈夫なら、そら一突きで見事に死ぬかも知れん、が、あの女のよ
うな身体の弱い女に、そんなことができるかできんか、誰が考え
ても分かることじゃないか』

こういつて来ると、相手の若者は、返事に窮したように、黙つ
てしまったのでした。僕は、もう一息だと思いました。

『何も、こんなことは、別にお前にきかなくても、初めからちや
んと分かつていることなんだ。掛りの医者連れて来ているのだ
から、大抵のことは、お前にきかなくても分かつてるのだ。が、
お前が本当のことをいう男であるか、お前に何か取りえがあるか
どうかと思つて、きいているのだぞ』

こういい詰めると、若者は苦しそうに、身を悶えていましたが、『ああお役人さま。私は死にたいのです。どうぞ、私を殺して下さい！』

彼は悲鳴のように叫ぶと、切なそうに、啜^{すす}り泣きを始めていました。

僕は若者を叱りつけるようにいいました。

『そんな気の弱いことでどうする。今が、お前の一生の中で、いちばん大事なときじゃないか。今までの間違っていたことを改めて、生れ変った人間として立派にやっていく、大事な潮時じゃないか、お前が、やったことが悪いとしたならば、死んだ人に対しても、社会に対しても、申しわけとして、相当な勤めを、立派に

果して、生れ變つて來るときじゃないか。こんな大切なときにウソを吐くようじゃ、お前はもう何の取りえもない、男子のなかの屑じゃないか。さあ、死にたいなどと、そんな氣の弱いことをいわないで、潔く本当のことをいったらどうだ。短刀の柄の端を、少し持ち添えてやったとか、一緒に転ぶときに、少し押してやったとか。本当のことをいつてみい！』

『夢中で、はつきりとは覚えていませんが、一緒に倒れるときに、私の手が喉のところへ行ったかも知れません』

若者は、とうとう本当のことを、喋り^{しゃべ}始めたのです。僕の面に、得意な微笑が浮ぶのをどうすることもできませんでした。

『なるほどな、が、お前も自分でやったことが分からんはずはな

いだろう、いや、お前はよう分かったつもりでいつているのだろうが、普通に考えると、どうもよく分からん。お前の肚はらになつてみれば、よく分かるが、普通に分かるようにいつてみんな。が、嘘をいえというのじゃないぞ』

若者は、しばらく無言でしたが、ようやく決心したように、

『よう考えてみると、あれが自分で突き刺して、非常に苦しがつていたものですから、あれの上から、のつかかつて、短刀の柄の残っているところを、持ってやりました。一緒にきゅつと押してやりました』

『それはどっちの手で』

『右の手でやりました』

『そのとき、左の手はどうしていたのだ。まさか、左の手を上へぼんやり上げてはいはすまいね。その時の姿勢は、どうだった』

『じつは左の手で女の首を抱えてやりました』

『なるほど。それで、よう物が分かった。それで、いうことに無理がない。だから、早くからいえばよかったのだ。それで、そのことには、少しも無理がない。よう分かった。が、もう一つ分かんことがある。それも一つ考えずに、あつさりいうたら、どうだ。そりや、こうこういうわけだったと、あつさりいうたらどうだ。無理のないよう分かるようにいったらどうだ。そら、お前がどうしてこういうことをやったかをついでにいつてくれ』

『それは、さつき申した通りです』

『うむ、さつきどんなことをいったかな。もう一遍いつてみてくれんか。さつきからたくさんきいたから、勘違いをしておるかも知れん。もう一度、くわしくいつてみてくれ』

こういうのは、犯人には事実を自白する機会を作つてやるためです。

『それは、兵に行く前に金でも溜めて、両親を欣ばせようと思つていましたのが、借金はできませんし、それにあの女が——』

『そうそう、さつききいたのは、そこだった。そこを一つ考えずにいつてくれ、よく世の中には、別れの辛いということがあつたが、国へ歸つて兵に行くということになると、自然あの女とも別れることになるのだつたな』

『実は、かれこれ申し上げていましたが、今まで申し上げたことも、一つですが、もう一つ他のことは、兵にはいるのが嫌だったのです。それで、私が思い詰めて、女に申しますと、女もそれではと申しまして、こういうことになったのです』

『それに相違ないか。この先、お前が違うことをいうと、お前に嫌疑がかかる上に、憎しみもかかり、結局はお前の損になるのだから』

『その通り、決して違いありません』

そう、いい終ると、若者はその顔に絶望の表情を浮べたかと思うと、そのまま崩れるように、仰向けに倒れてしまいました。

彼が、自殺幫助の罪を犯していることが、明らかにされたので

す。自殺幫助の罪は、六カ月以上七年以下の懲役または禁錮です。若者の尋問が終ると、うまく問い落したというような、職務意識から来る得意さと満足とが私の心のうちに湧いて来るのを、禁ずることができませんでした。ほとんど、一時間に近い、長い尋問のために、疲れ果てて、蒲団に寝かされた後も、苦しそうに肩で息をしている若者を、僕は、獵人がちょうど自分の射落した獲物でも見るような目付で、しばらくはじっと見つめていたのです。僕の尋問の綾に、^{あや}うまく引つかかって、案外容易に、自白してしまった若者に、^{あわれ}憫みを感じながら、しかも相手の浅はかさを、^{さげす}蔑むような心持さえ動いていたのです。

そのときに、警部が僕に近づいて来て、若者にはきこえないような低声で、

『ちよつとおいで下さい、解剖をやっています』と囁ささやきました。

僕は、それをきくと、女の死体のある元の四畳半に帰って行つたのです。さすがに、女の死体は、蒲団の上に、真つすぐに寝かされていました。よれよれに垢じみた綿ネルらしい寝衣を、剥ぎ取られた姿は、前よりもつとみじめな浅ましいものでした。胸のあたりの蒼い瘡せた皮膚には、人間の皮膚らしい弾力が少しも残っていないのです。露わに見えている肋骨や、とげとげしい腕の関節などが、この女の十年の悲惨な生活をまざまざと示しているのです。また、その身体の下半部に纏まとっている腰巻が、一目

見た者が思わず顔を背けねばならないほど、ひどいものでした。それは、ネルでしたが、地の桃色が褪せてしまつて、ところどころに白い斑まだらができて、それが灰色に汚れているのです。よく、注意して見ると、それは普通の婦人がするように、ネルの上に白木綿を継ぎ足してあるのですが、その白木綿が、鼠色に黒くなつているところへ、ほとぼし迸つた血がかつたため、白木綿のところまでが、ネルの部分と同じように、汚れた桃色に見えていたのです。

女は、見る見るうちに、喉の傷口をあば剖かれ、胸から腹部へと、次々にあば剖かれて行くのでした。警察医は、鶏の料理をでもするようひととおに、馴れ切つた冷静な手付きで、肺や心臓や胃腸など一通り見た上で、女に肺はいせん尖カタルの痕跡があるといいました。

僕は、死体の解剖を見ているうちに、自分の氣持が鉛のように重苦しくなつて来るのを感じたのです。女の栄養不良の瘠せ果てた身体は、彼女の過去の苦慘な生活を、何よりも力強く、僕の胸に投げつけるのです。十年もの間、もがいた末に、なおこうした地獄の境目を脱すべき曙光を見出し得ない彼女が、自殺を計るということは、当然過ぎるほど、当然なことのように思われて来たのです。前借といえ、きつと三百円か五百円かの端金^{はしたがね}に違いない。そうした金のために、十年の間、心も身体も、めちやくちやに嘖^{さいな}まれた彼女が、他の手段では、脱し切れない境地を、死をもつて脱しようとすることは、もつとも至極のことのように思われたのです。現代の売淫制度の罪惡は、売淫そのものにあると

いうよりも、こうした世界にまでも、資本主義の毒が漲みなぎっていて、
売淫者自身の血や膏あぶらが、楼主といったものを、肥しているという
ことです。貧乏な人たちの子女が、わずかな金のために、身を縛
られて、楼主といったような連中の餌食になって骨まで舐しゃぶられて
いることです。そう考えて来ると、そうした犠牲者が、そのどう
にもならない境地を、死をもつて脱するのは、彼らが、最後の反
抗であり唯一の逃路であるように思われて来たのです。

こうした浅ましい身体で、こうしたみじめな服装をして、浅ま
しい勤めをしているよりも、一思いに自殺する方が、この女に、
どれだけ幸福であるかわからないと思つたのです。

そのときに、僕はこの女の自殺を手伝ってやったあの若者のこ

とを考えたのです。この女は、明らかに死を望んでいる、そして死ぬ方が、何よりの解脱である。この女が、自殺しようとしてもがいているときに、ちよつと短刀を持ち添えてやったことが、なぜ犯罪を構成するのだろう。現代の社会のいちばん不当な間隙に、身を挟まれて苦しんでいる彼女が死を考えることに何の無理があるのだろう。また彼女が死んだからといって、何人が損をするというのだろう。楼主が損をするというのか。否、彼は彼女の血と膏とで、もう十分舌鼓を打った後ではないか。我々が、彼女の死を遮るべき何の口実ももっていないのではないか。またたとえば、彼女の死を遮り止めたところで、彼女を救つてやるいかなる方法があるだろう。それなのに、彼女が死を企てたときに、ちよつと

その手伝いをしたあの若者が、何故に罰せられなければならないのだろう。

そのときに、僕はふと、さつき尋問の手段として、若者にいいきかせた自分の言葉を思い出したのです。

『……女が可哀そうじゃないかね。どうせ二人で死んで行くのだもの。女が苦しんでいれば、お前も手をとって力を添えてやるのが人情じゃないか。それが、人間として美しいことじゃないかね』

自分が、手段のためにいったこうした言葉が、力強く僕の胸に跳ね返ってきたのです。あの若者のような場合に、あの若者のような態度に出ることは、何人からも肯定さるべき、自然な人情ではないか。それが、人間として美しいことではないか。それだの

に、自分自身死にそこなつて苦しがつている彼を、法律は追及して、罰しなければならぬのだらうか。

そんなことを、考えていると、僕はさつき、傷に悩んでいる青年を脅^{おど}したり賺^{すか}したりして問い落して得意になつていた自分の態度が、さもしいように考えられて来たのです、僕の職務的良心が、ともすればぐらぐらに崩れそうになつていたのです。

出張したのは二時頃でしたが、すべての手続きが片づいた頃には、日がとつぷりと暮れていました。僕らは、引き上げようとして、俤が来るのを待つていたときです。臨検中は、私人が二階へ上るのを、一切禁じてあつたのですが、もうすべてが終つたので、

家人の上るのを許したのです。すると、待ち構えていたようにいちばんに上つて来たのは、さつき見かけたこの家のお主婦かみなのです。

僕の顔を見ると、平蜘蛛のように、お辞儀をしながら、そのくせ、額ぬかごしに、冷たい目でじろじろ見ていたかと思うと、いいにくそうに、

『旦那はん。あの指輪ゆびはめ、取つても大事おまへんか』と、こういうのです。

『指輪！ 指輪が、どうしたのだ』

お主婦は、ちよつと追従笑いをしていましたが、

『へえ。あの子供がはめておりますんで』

僕はそうきいたときに、妙な悪感を感じずにはいらなかったのです。

『じゃ、あの死体の指にはいつている指輪を欲しいというのだな』
『へえ！ さよで』

僕は、頭から怒鳴りつけてやりたいと思ったのです。が、しかし、検事としての理性が僕の感情を抑えたのです。死体から、指輪を剥ぎ取るということ、それは普通な人情からいえば、どんな債権債務の関係があるにしろところで人間業ではないような恐ろしいことです。けれども、法律的にいえば、それは単に物の位置を移すということに過ぎないのです。

『よろしい』

僕は、そう苦^{にが}り切つて答えるほかはなかつたのです。お主婦は、一人では怖いからといって、刑事に付いてもらつて、死体の置いてある部屋の方へ行きました。

お主婦の姿を見送つた僕の心は、憤懣とも悲しみとも、憂愁ともつかない、妙な重くるしい、そのくせ張り裂けるような感情で、いっぱいになつていたのです。

普通の人間が死んだ場合は、たとえ息は絶えていても、あたかも生あるもののごとくに、生前以上に尊敬され、待遇されるのに、彼女は——生前もがきにもがいた彼女は、^{さいな}嘔まれた上にも嘔まれた彼女は——息が絶えると同時に、物自体のように取り扱われ、身に付けていた最後の粉飾物を、生前彼女を苦しめ抜いた楼主に

奪われなければならぬかと思うと、彼女の薄命に対する同情の涙が、僕の目の中に汪然と湧いて来るのを、どうすることもできなかったのです。

お主婦^{かみ}は、やがて指輪を抜いてきました。見ると、それは高々八、九円するかしないかの、十四金ぐらいの蒲鉾^{かまぼこ}形の指輪なのです。僕はそのときむらむらとして、こんなことをいったのです。

『お前、その指輪を、どうするのだ』

お主婦は、おどおどしながら、

『あの子供に、借金が仰^{ぎようさん}山ありますけに、これでも売って、

足しにしようと思っているのです』

『そうか。じゃ、誰かに売るんだな。売るのなら俺に売ってくれ

んか。何程ぐらいするんだ。十円なら安くないだろう』

『へえへえ。結構です。けど、何やってこんなものをお買いになるのどす』

『まあ！　いい』

そういつて、僕はその指輪を買ったのです。

そのとき、ちょうど俵がやって来たのです。僕は、立ち上ると、お主婦が、不思議そうに見ているのもかまわず、錦木の部屋へ入って行つたのです。そしてお主婦から買い取つた指輪を、元の瘡せ細つた指に入れてやつたのです。もう、十一月の半ばであるのに、死体の上に、あせためりんす友禪の単衣ひとえしか掛けてないのが、何だか薄ら寒そうに見えたのです。が、顔だけはまことに、眠る

がごとく目を閉じていたのが、そのときの僕には、何よりの心やりでした。

僕は、僕の後から、僕が何をするのだろうと、おずおず見に来たお主婦に叱りつけるようにいったのです。

『いいかい。この指輪は、錦木のものじゃない。俺のものだぞ。』

もし今度この指輪を取ると、ひどい目にあうのだぞ』

僕は、お主婦が何か畏かしこまみつていつているのを聞き流して、梯子段を降りたのです。

僕は、俵に乗ってから、立会いの警部や刑事の手前、自分の最後の行動が、突飛であつたことを後悔したのです。が、後で悔いはしたものの、あの場合の僕は、ああした行動をするような、不

思議な興奮に囚^{とら}われていたことは事実です」

青空文庫情報

底本：「菊池寛 短編と戯曲」文藝春秋

1988（昭和63）年3月25日第1刷発行

入力：真先芳秋

校正：小林繁雄

2005年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

島原心中

菊池寛

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>